

## スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根源的価値形成の授業研究（ ）

### - 授業実践の基本構想と事例研究（その１）の概要 -

大阪教育大学 人間学論叢 第10号（2007年）抜刷

## 補論２．気づきからはじまる知の深化とマトリックス的關係

有限会社 カヤ 平井良信

### はじめに

本授業研究は『絵本「あなたへ」を活用した授業研究を通して、「心の教育」の第一歩とする「じぶんを見つめること」と「他者とつながる力」がどのように成長していくのかを見ていく。』とある。本稿では、学級全体の動向にも関心を寄せながらCさんの個人事例を基に若干の考察を加えたい。

### 事例研究：Cさん

Cさんは、最初から注目していた児童であるが、一見体も小さくおとなしいような性格に見える。しかし、そろそろ女性特有の思春期の目覚めなのか、頭髪や服装に興味やこだわりが見える。

担任教師からの情報では、Cさんは『Dさんを中心とした友達関係で、5年生のとき不登校がちになり、先生とメールのやりとりをするようになった。6年生の4月（2005年4月）から毎日登校出来ている。父親不在。』である。

最初の出会いから目立ってはいいたが、二回目の出会いも衝撃的であった。それは昨年7月20日のサマーキャンプでのことであった。Cさんは友達と二人で「漫才」を実演したのである。おとなしくて前に出たがらないと思われるCさんがみんなの前で漫才をする事に驚いた。運動場で音響設備もなく話している内容がよく聞こえなかったので論評は控えたいが、それなりにみんなには受けていたようである。何度か間違えたところをやり直したり、少し照れてはいいたが度胸の良さにも驚かされた。Cさんは、このように自己表現が好きな児童と見受けられ、後に授業で制作する作品でもCさんの技量が存分に発揮されるのである。

今回の授業研究は、絵本「あなたへ」シリーズから「じぶん」「ともだち」「ひとりぼっち」「たいせつなあなた」を教材にして約4ヶ月の間に計10回の授業として行われた。この絵本「あなたへ」シリーズはシンプルな「ことば」「絵」で構成されていて、作者、翻訳者、イラストレータの想いが充分児童にも伝わったと思われる。元々落ち着いた良いクラスだと思われるが、それぞれの授業でもみんな真剣に絵本に接し、熱心に読み解き考えていたようである。絵本の表現は12才の児童にはすこし難しかったかも知れないが、言葉のインパクトや行間を各自のレベルで感じ取っていたと思われる。

授業での内容については詳しく触れないが、Cさんに関わる部分を掲載してみよう。Cさんは終始落ち着いた態度で授業を受け、特に制作には集中していた。

以下は、Cさんの授業中での発言やワークシートなどの書き込みである。

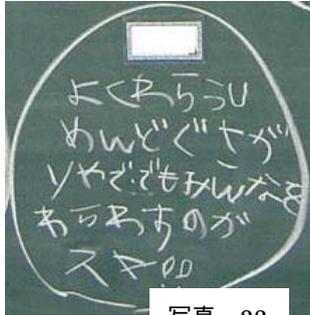


写真 - 23

「こうなりたいことを書いてもいいですか」 じぶん地図を書くときに

「ここはうれしい気持ちや悲しい気持ちを考えてくれる」  
「よくわらう、めんどくさがり、でもみんなをわらわせるのがスキ」

「いつもあいてのたちばでかんがえたことないから、ちゃんといっぱいかんがえたほうがいい!!」

「人はみんなちがうとくちょうがいっぱいあるのに!!」

「ひとりでなにもできない人があつまっている」

また、「じぶん地図」づくりの3作品は、下記の通りである。

・第1回授業「じぶん地図」



写真 - 24

Cさんの「じぶん地図」(写真 - 24) 色彩感覚もよく綺麗でバランスの取れた内容である。特に画用紙全体の配置感覚がすばらしい。素直な表現が多く特に問題は感じられない。

・第7回 11.08 じぶん地図パート2」(論文 P18 参照)



写真 - 25

Cさんの「じぶん地図パート2」(写真 - 25)

相変わらず、カラフルでバランスが良い。

・第10回「絵本をつくろう」「じぶん地図パート3」

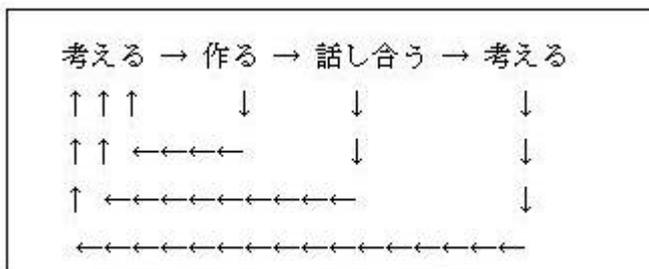


Cさんの「じぶん地図パート3」  
(未来のじぶん地図) (写真 - 26)

唯一全体のバランスが悪い。  
迷いがあって未完成なのであ  
うか。  
右の空白にそれが伺える。

今回の授業で象徴的なことは担任教師の指導方法であった。それは絵本「あなたへ」4冊を鑑賞するだけではなく、対象化すべく「じぶん地図」づくりや「絵本」づくりなど、制作することを主眼においたことである。つまり「能動的な学び」へ導いていたことである。

考えること、作ることによって新たな発見があり、自分の手で書いた言葉、描いた絵が一度吐き出したことで自分に返ってくる。(図 - 5 参照) 自分が表出した事に自ら気づき更なる展開に繋がる。表現することの醍醐味であろう。文字、絵、声、音楽、演劇、ダンス(パフォーマンス)という形に

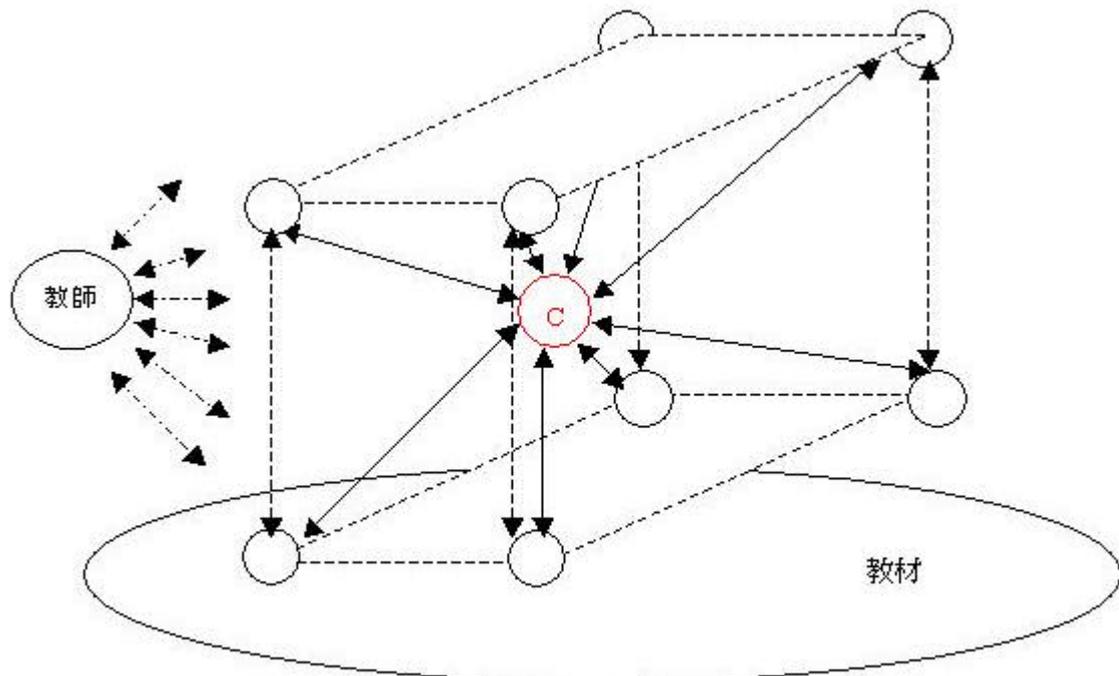


【図-5】フィードバック効果

した瞬間にいままででない自分を感じることが出来る。これは、ひとり一人に起こるのであるが、周りの児童の表現を知ることにより、また新たな気づきがありより深化し相対化され影響し合う

のである。

担任教師は第1回目の授業時の「じぶん地図」をつくる際に、自分自身の「短所・長所」を書くところで、自分の考えだけではなく、他の児童にも「短所・長所」を聞きなさいと促していた。また、あらゆる機会に、グループ討議や発表というスタイルでの児童同士のコミュニケーション(学び合い)を確立している。



【図-6】立体マトリックス（Cさんと他者の関係）

図-6は、Cさんを中心にした他者と影響し合う関係図である。もちろん教師の位置がはみ出た一辺でも良い。この関係図は時々刻々と分子間運動のように蠢いている。

「0」地点（授業前）から深化した自我は、他の深化した自我との新たな「出会い」（角度差：C3からC4）によって、更なる深化を遂げる。もちろん教師との関係においても同様である。

（図-7）

4		↑		↑		↑					↑		↑		↑	↑				
3	↑	↑		↑	↑		↑	↑		↑	↑		↑	↑	↑	↑				
2	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑				
1	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑				
0	_____																			
	教師	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	☉	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ

【図-7】マトリックス断面図（縦軸の数字は仮定）

10回の授業を経て、じぶんを見つめ、他者を考え他者とつながる力が成長していくなかでのCさんの感想である。

Cさん	<p>・10月14日 「じぶん」を終えての感想</p> <p>あたしは、自分とゆうものをかんがえたことがなかったけど、はじめてかんがえてたのしかったし、でも、つぎは、なぜうでや、てや、みみとがあるのかをしてみたいとおもっているし、自分のやつもいいケツカがでてよかったとおもう。</p> <p>まえまでは、自分がおもっていることをうっすらしかわからなかったけど、その自分ってかいたらいっぱいわかったこともあるし、なおさないといけないともわかった。</p>
	<p>・12月20日 10回の授業を終えての感想</p> <p>いままでのべんきょうでいっぱいわかって自分の気持ちとか、いっぱいわかってうれしいです。えほんづくりもたのしいです。3ガッキもぜひきてほしいとおもっています。また、本とかつくりたいと思っています。いいじゅぎょうでした。</p>

また、その他の児童の感想を掲げる。少し長いが彼らの言葉がすべてを物語っているのではなかろうか。(出典：張・濱内 P21)

Dさん	<p>&lt;前略&gt;絵本を書いて自分でも、本当にこう思っていたんだと思いました。&lt;中略&gt;『自分』はこんなだと思ふことがたくさんできて、私はこうだったんだなあと思いました。</p>
H君	<p>自分にできることは、とても迷いました。&lt;中略&gt;次の課題も次の課題も、思いつきそうなことが難しかったです。不思議でした。気持ちはおくがふかいです。</p>
J君	<p>ぼくはもっとこのことをしりたいです。人の心はどうなっているのかいっぱいしりたいです。&lt;中略&gt;ぼくもいっぱい夢のあることを書きました。ほかのみんなも書いていました。だからたまにみんなのを見てびっくりすることがあります。みんなうまいなあとか、言葉の発言が上手だとか、絵もうまいとか、みんなもちやんと書いてるなあと思いました。できあがりのときがものすごくうれしかったです。</p>
Kさん	<p>内容が深すぎてよく分からなかったところもあった &lt;中略&gt;こんなことを思っている人がいるということに少しきょうみをもった。自分の心の意見もたくさんいえて、自分を正面から見た気持ちになった。みんなの意見をきいて考えて発言するのは、とてもたのしかった&lt;中略&gt;いろいろなことを教えて貰えるいい授業でした。</p>
Lさん	<p>本当の絵本と自分の作った絵本が全然ちがったので、作るひとによって、テーマが同じでも、伝えたいことが別々なんだなあと思って、&lt;中略&gt;じぶん地図は、自分を見つめ直すのに最適だなあと思いました。</p>

このように生き活きとした児童の感想文で明らかなように、戸惑い悩みながらも「じぶん」を突き詰め、「他者」に想い馳せ続けること、また、じぶん地図のような作品にすることで、気づきがあり発見があり素直にうれしかったのであろう。

この授業研究の目的である『「じぶんを見つめること」と「他者とつながる力」がどのように成長していくのかをみていく』ことは最早達成された。いや、彼らは、成長したそのことに留まらず、今後生きていく上で最も重要と思われることを会得している。それは「学ぶ楽しさ、喜び」を知ったことである。

10回の授業が終わり、何もできなかった私は、彼らに何かを伝えたいという思いが募り、無理をお願いして2時間の授業をさせていただいた。「映像プロデューサーとは」少し難しいかなあとも思ったが、映像という媒体を作る過程を話すことで何かを感じて貰えたらと思い、「自己紹介CM」の絵コンテの制作も交えながら行った。終始児童の反応も芳しくなく授業は終わり、感想を書いて貰うとほとんどの児童は「わからなかった」と書いていた。しかし、唯一Cさんだけは感動する言葉を書いていてくれたのである。その言葉は「絵とおとがあっていた。」これは映像に於ける一つの究極の真実である。Cさんはするどい感性をもっていることは確実であり、私はその言葉で救われる思いであった。

事前の準備段階も含めると約半年の間に14～5回会っている彼らと、我々観察者との間にも個々に交流があったと思われる。そのなかでもG君は私が以前学習ゲームを作ったことを先生から聞いていてサインをせがまれたこともあった。そして私の仕事のひとつの形である「カメラマン」にも興味を示してくれ、卒業の文集にその職業を目指すと書いていた。元々彼の志望でもあったであろうカメラマンになることに、私と出会い私の授業を聞いたからではなくとも、身近に感じてくれて影響を与えた結果なのかも知れない。また私も何かを感じたからこそ伝えたくなったという衝動的な行為も含めて、我々観察者も「学びのマトリックス」に児童、教師と共に組み込まれていたことは必然であろう。

今回の授業研究で、再度考えさせられたのは、4ヶ月間での10回の教室という閉鎖的な空間での指導方法が、他の圧倒的な多くの時間での出来事（一般の教科の授業、他のクラスの児童との関係、家庭での出来事、塾でのことなど）との関連性についてである。これは今後何らかの条件設定と共に課題とされることを希望したい。